

平成 29 年度 北海道総合計画推進本部・推進協議会(29.10.13) 開催概要

1 日 時：平成 29 年 10 月 13 日（金）17：30～19：00

（TKP ガーデンシティ札幌駅前 2 階 2C）

2 出席者：[有識者] 北星学園大学・岡田教授、北星学園大学・栗山教授、

（一社）生涯活躍のまち推進協議会・芳地事務局長

NPO 法人どりーむ・わーくす・水尻理事長

[北海道] 総合政策部長、政策局長、計画推進担当局長、地域創生局長、

福祉局長、高齢者支援局長、農業経営局長

3 主な発言内容

- 地域福祉活動はチャーハンづくりに似ている。チャーハンは、わざわざ具材を買って作るのではなく、その時にある物を使い、味を工夫するなどのアイデアで作ると、意外と美味しいチャーハンができる。それと同じで、地域のあの人とこの人をつなげたら面白いことができるのではないかと、といったアイデアをうまく使えば、地域ならではの福祉活動ができる。
- どの地域でも潜在的に能力や強さを持っているので、それに気付いて上手く働きかけて人をつなぐ、専門的な教育やトレーニングを積んだコーディネーターが必要。
- 地域福祉支援計画の中心になっているものは、安心して心豊かに暮らしていける地域共生社会の実現という抽象度の高い目標だが、これは北海道に限らず日本全国が、地域共生社会をどうしていくかということで、日本共通に抱えるものを意識的に捉えていこうというもの。
- 「地域共生社会の実現」を目指すためには、地域福祉を支えるためにどのような人づくりをするかという課題、これを支え合っていくための基盤・仕組みをどうしていくのかという問題、そして、最終的には暮らしやすい地域づくりを実現していくために何が必要なのか、この三つ巴の捉え方を起点に具体的に考えていかなければならない
- 各自治体では生涯活躍のまち構想を作り、非常にきれいな報告書ができたが、これを誰が実行するのか、実行する者が誰もいないがどうしたらいいかなど、多くで行き詰まっているというのが現状。
- 「地域包括ケアをトータルで進めること」が今後の課題。町の中全体で見る仕組みをつくるため、空き家を資源として活用しながら、町全体で 24 時間 365 日の見守り機能を持ったまちづくりをしていくというのが課題。
- 農福連携の意義は、障がいのある人が農作業を通じて価値を生み出すこと、その価値に対する対価で自立をすること。
- 農福連携の推進に当たって一番大事なものは、マッチングのできる農福連携推進のコーディネーターである。